

太宰府の文華と公文書館だより

146

近世紀行にみる太宰府

『江漢西遊日記』

ページID: 7241

『江漢西遊日記』は、日本で最初の銅版画家として知られ、蘭学者でもあった司馬江漢（1747～1818）が、天明8（1788）年に江戸を発ち、洋画修行のために各地を巡りながら長崎・平戸に滞在し、再び江戸へ帰るまでの一年間の旅日記です。この作品の解説は『太宰府市史通史編Ⅱ』に掲載しています。江漢は、長崎への旅の途中で太宰府を訪れ、二日間かけて太宰府天満宮や観世音寺、戒壇院、荻萱の関跡などを見物しました。都府楼跡では「田の中、路の傍ら、編目付たる瓦いくらもあり。（中略）一つ二つ持帰りぬ」と、古瓦を拾って持ち帰ったことを記しています。都府楼跡の古瓦は、貝原益軒の『筑前国統風土記』にも記され、旅人の中には江漢のように記念品として持ち帰る者も少なくなかったようです。ところで江漢が拾った瓦には後日談があります。

今年のはじめに九州国立博物館で開催された特別展「平戸モノ語り―松浦静山と熙の情熱―」において、

平戸藩主・松浦静山のコレクションとして「都府楼古瓦」が展示され、箱書に、天明8年に司馬江漢が大宰府跡で拾得した瓦だと記されています。江漢は平戸滞在中に藩主静山と対面し、茶のふるまいを受けるなどの交流がありました。翌年参勤交代で江戸へ上った静山に、江漢は前年秋に都府楼跡で拾得した古瓦にその旨を墨書して贈りました。古瓦を変喜んだのではないのでしょうか。もし対面したとすれば、同好の士として大いに話が盛り上がったでしょう。ともかく、太宰府で江漢に拾われた瓦は江戸に持ち帰られ、そこで松浦静山の手に渡って平戸の地で大切に保存されてきたのです。そして再び静山のコレクションとして太宰府へと帰ってくる、というのは随分ドラマチックな話です。江漢や静山をはじめ、江戸時代の人々は都府楼跡の古い瓦を見て、菅原道真が漢詩に詠んだ都府楼の瓦はこれかと遠い過去に思いをはせましたが、『江漢西遊日記』に出てくる瓦はこれか、と「都府楼古瓦」を見るのもまた面白いものです。

太宰府市公文書館 荻野 寛美